

# 少年少女小説に見るジェンダー規範——佐藤紅緑を事例として——

渡部 周子

(総合文化学科)

Gender Models in Boys' and Girls' Novels -As seen through Koroku Sato's Works-

Shuko WATANABE

キーワード：少年少女小説、ジェンダー、佐藤紅緑 Boys' and Girls' Novels, Gender, Koroku Sato

## 一、はじめに

本稿は、近代日本の少年少女小説に示されたジェンダー規範について、考察するものである。これまで筆者は、「少女」期の「規範」を明らかにする目的で、修身教科書や、医科学の言説といった権威的な資料を分析してきた。またマスメディアによる「規範」の流布を明らかにするために、少女雑誌やそこに掲載された少女小説を事例に分析してきた。時期は、主に、明治から大正期としてきた。

本稿は、これまでの研究目的に引き続きものであるが、昭和のはじめから一〇年代に考察時期を広げ、また少年小説を分析に加え、少女小説との比較を試みる。対象とする作家は、戦前の代表的な少年小説の書き手として一般に評価を得ている佐藤紅緑<sup>1)</sup>とし、少年小説からは「ああ玉杯に花うけて」、少女小説からは「夾竹桃の花咲けば」とする。また、分析に際しては、主人公の人生の転機となる地点で用いられた「格言」(簡潔に人生の真理や機微を述べ、処世の訓戒となるような言葉。多くは昔の聖人、偉人、学者などが言い残したものだ。金言<sup>2)</sup>)に注目することにした。

## 二、分析対象と方法

### 二-1、少年少女小説並びに少年少女雑誌について

本稿が、少年少女小説を考察するのは、大人が求める子どもの理想的であり方が顕著に示されていることによる。また、「格言」に注目するのは、理想的な子ども観が端的に、そして象徴的に示されていることによる。

もちろんのこと、小説が描く世界は表象であって現実ではない。だが、私たちが言語資源を学ぶのは、実際の言葉づかいを通してではなく、「小説、テレビドラマ、映画、広告、マンガ、アニメなどのフィクションの会話」からだ<sup>3)</sup>という。

分析対象とする作品が掲載されたのは、大日本雄弁会講談社『少年倶楽部』(一九一四(大正三)年創刊)およびその兄妹誌『少女倶楽部』(一九二二(大正一)年創刊)である。『少年倶楽部』は、昭和のはじめから一〇年代初頭において、圧倒的な発行部数を誇り、一九三六(昭和一一)年一月号は七五万部であった<sup>4)</sup>という。また兄妹雑誌として、九年遅れて創刊された『少女倶楽部』は、一九三〇年代には五〇万部近い発行部数(最高部数は、一九三七年新年号の四九万二、〇〇〇部)

だったとされる。<sup>⑤</sup>『少年倶楽部』は、地方の少年を特に読者対象として重視した雑誌であり、これは社長野間清治をはじめ、大日本雄弁会講談社に参加した多くの人が、地方農村の貧しい小学校教師であったことによる。<sup>⑥</sup>一九二二(大正一〇)年から一九三二(昭和七)年まで編集長の座にあった加藤謙一は、「東京あたりの雑誌は文学者が作っているのは間違いだ。教育者が作るべきだ。そして出来れば日本中の子供に教育者が作った雑誌をよませるべきではないか」と考え、雑誌記者になるために東京に上京したものの、「どこの雑誌社でも大学の文科出でなければ使ってくれ」ず、講談社だけは「社長も大学を出ていないし学歴を問わない」ということで、試験を受け一九二二(大正一〇)年に採用された。<sup>⑦</sup>『少年倶楽部』の編集方針の骨子は「学校教育を補うことにあり、ただし、「児童自らが進んで愉快に読む」行為の中でなされねばならず、「面白く読む中に、知らず識らず或る種類の教育を受ける」ということでなければならぬ」と社長の野間清治は捉えていた。<sup>⑧</sup>『少年倶楽部』が、どのような少年を育もうと意図したのかは、以下の野間の言葉に顕著に示されている。

雑誌を以てこの精神教育を助けてみたい。或いは忍耐とか、或いは勇氣とか、或いは恭謙とか、或いは感恩とか、種々なる徳育に力を尽してみたいと思います。

そして我等は、徳育を中心信条として「偉大なる人」にならねばならぬということを標榜して少年に対しようと思う。これを本心とし、骨髄としたいと思う。<sup>⑨</sup>

### 三、少年少女小説の梗概

ここで、本稿が主として取り上げる少年少女小説の梗概を示す。<sup>⑩</sup>

#### 三―一、佐藤紅緑の少年小説

「ああ玉杯に花うけて」(『少年倶楽部』一九二七(昭和二年五月)―一九二八(昭和三年四月))

青木千三ことチビ君は、埼玉県浦和町に育った少年で、父は亡く、母と共に、貧しい豆腐屋である伯父の家に引き取られ、家業を手伝っている。亡くなった父親は、元々は資産家であった。しかし、政党運動に熱中したため、財産を手放すことになってしまい、千三の家であったという豪邸も、今では人の手に渡ってしまっている。このため、母親に、いつか立派な家を建ててあげたいと千三は願っている。また、千三は学業優秀で、小学校では常に一番だったものの、経済的な事情から中学に進学できなかった。そんな不遇な環境にある千三を、助役の息子の阪井や医師の息子手塚は暴行や暴言を浴びせ追い詰める。しかし、中学生という違う境遇となっても、変わらぬ態度で千三を励ます、柳光一という友人もいる。貧しい中で私塾に通い、塾の教師である黙々先生に教え導かれ、また黙々塾の先輩安場や友人の励ましのもと、苦学を重ね、第一高等学校の入学を果たす。

#### 三―二、佐藤紅緑の少女小説

「夾竹桃の花咲けば」(『少女倶楽部』一九三〇(昭和五年七月)―一九三二(昭和六年六月))

主人公の照子の実母は、旅先で娘を産むとすぐに亡くなった。旅先で実母と知り合った井原夫妻は、アメリカに居るといふ照子の父に、手紙を送るが何の返事もない。母を亡くし、父の行方も知れない照子を引き取った井原夫妻は、実子の信子と分け隔てなく育てる。照子は、養父の百助と養母のお浜が実の両親であり、信子とは双子の姉妹だと信じて育つ。行方も生死も不明だった実父は、長年の苦勞の末、アメリカで石油を掘り当て巨万の富を築くことに成功する。実父が日本に帰国したのは、照子が生まれてから、十年以上たつてからのことだった。照子は、実父と継母康子の元で育てられることになる。継母康子は実の母もかくやというほど、照子の教育に心血を注ぐ。新しい家族と馴染もうと、気苦勞を重ねる照子に、さらなる試練が襲う。実父の事業が失敗し、会社の再興の目的から父は再びアメリカに渡る。日本

に残された照子と継母は、いつ帰るとも知れぬ父を待ち、照子は学校もやめ、日々の食事にも事欠く貧しい生活に耐える。やがて父はアメリカから帰国し、会社は持ち直す。照子は何不自由のない裕福な生活に戻ることができ、学校にも再び通うことができる。

#### 四、少年小説「ああ玉杯に花受けて」に見る格言

梗概で示した通り、千三は貧しい境遇で苦勞を重ねている。父はおらず、母と共に伯父の家に身を寄せ、子どもながら厳しい労働に耐えている。小学校時代から変わらぬ友情を寄せてくれる友人柳光一もいるが、彼を侮辱する少年達の行為は、後述するように悪質である。千三は、苦勞を重ねて「暗い憂鬱」により「心を閉ざし」て行く。<sup>14)</sup> 千三は絶望の中で次のように歎息する。

「いくら働いても御飯が食べられないのだ、働かない方がいい、死んでしまおう方がいい、僕などは生きてる資格がないのだ、路傍の蛙のように人に踏まれてへたばってしまおうのだ」<sup>15)</sup>

その千三を救うのは、私塾の師匠黙々先生こと篠原浩蔵である。黙々先生は、千三に知識だけでなく、希望と誇りを与える。黙々塾で学問に励み、千三は第一高等学校への入学を果たす。

つまり、黙々先生との出会いこそが、千三の人生を変える転機なのである。記念すべき入塾の日に、黙々先生は、「大学」から引用し、「湯の盤の銘に曰く、苟に日に新にせば、日日に新にし又日に新にせん」と語って聞かせる。その意味を問われた千三は、「毎日毎日御湯へ入って新しくなれというのでしよう」と推測したところ、黙々先生は概ね合っていることを称賛し、「人間は毎日顔を洗いい口を嗽いで我が身を新にする如く、其の心をも毎日毎日洗いい浄めて新たな気持ちにならなければならん、とこういうのだ」と解説する。<sup>16)</sup>

しかし、千三の「暗い憂鬱」は簡単には、浄めることはできない。塾に通い学問に励むことで、一旦は前向きな気持ちへと変わっていくの

だが、しばらくして、千三の母親が病気になる、治療費を工面するのにも苦心することになる。困窮する千三に追い打ちをかけるのが、医者の子手塚である。手塚は、泥で汚れた野球の球を豆腐桶に入れ、千三の売る豆腐を駄目にする。其の場面を次に引用する。

手塚はこう言って自分で溝泥の中から球を撮み上げ、いきなり千三の桶の中で球を洗った。

「それは困ります」と千三は訴える様に言った。

「豆腐代を払ったら文句がないだろう」

手塚は笑って奥へ引込んだ。

「待てッ」と千三は呼止めようとしたが、じつと下唇を噛んだ。

「今手塚と喧嘩をすれば母の薬を貰う事が出来なくなる」

彼の眼から熱い涙が湧き出た。人間の貴重な食料品！其の桶の中に溝泥にまみれた球を突込んで洗うなんて余りの乱暴である。

だが貧乏の悲しさ、彼と争う事は出来ない。<sup>15)</sup>

千三の悔しさは、手塚の横柄な態度や侮辱的な言葉だけに依るのではない。手塚の住む豪邸は、元々は千三の生まれた家で、経済的な困難によって手放したものだから一層理不尽に感じる。泣いて、がっかりして、千三は次のように嘆息する。

「俺と伯父さんは夜の眼も寝ずに豆腐を作る、だがそれを食うものは金持ちだ、作った俺達の口に入るのは其の余りかすの雪花菜だけだ、学問は止めよう」<sup>16)</sup>

この「すさんだ心持」<sup>17)</sup>に喝を入れるのは、黙々先生である。黙々先生は、千三が母からも聞いたことがなかった、自身の祖先が北畠顕家、親房等南朝の忠臣であることと、その偉業について教えられる。そして、「祖先の名を辱しめないように奮発するか」と発破をかける。<sup>18)</sup> 黙々先生は、さらに塾の出身で、第一高等学校の学生、安場を千三に

引き合わせる。安場も貧しい家で育ったが、黙々先生の指導と、自らの努力により、第一高等学校に合格する。安場は千三を、「貧乏を気にしちやいかんぞ」と励まし、豆腐売りの喇叭の音を、尊い、勇ましいと賞賛する。恩師や先輩の励ましによって、千三は誇りを獲得し、これにより「暗い憂鬱」を浄めることができる。

### 五、少女小説「夾竹桃の花咲けば」に見られる格言

続けて、佐藤紅緑の少女小説「夾竹桃の花咲けば」について見てみたい。

主人公照子の人生は波乱万丈である。しかし、特に重要な転機が描かれているのは「光と暗」という章である。ようやく親子が再会できたというのに、実父が事業に失敗したことから、再び実父は単身アメリカに渡り再起を図り、照子と継母康子のみが日本に残ることになる。そして、これまでの贅沢な暮らしからうって変わって、学校も辞めて、貧しい生活を送ることになる。

この章の冒頭は、墨子の教えを解説し始まる。

主人公の照子は、少しずつ「気をひがませ」、「無邪気」で「純良」な「心に汚点」が出て来るようになる。ここで、次のように佐藤は記す。

昔々、中国に偉い学者があつた。その名は墨子である。墨子は或時白い絹糸を見て涙を流した。なぜお泣きなさいますかと或人が訊いた。すると墨子はこう答えた。

「この通り真白な糸が、染めようによって赤くもなれば黒くもなり、青くもなり黄色にもなるかと思うと私は悲しい。人の心も元はみな糸のように白いのだ。悪い事に染まるから悪人になる、だからよほど気をつけて色に染まらないようにしなければならぬ」

特に少女の心は絹糸よりも白い。少しでも汚ないものにふれると染まってしまう。染まった糸は元の通りに白くするにはよほど

骨を折らねばならぬ。

継母は、有名な理学博士の娘で、教養高く真面目で誠実であるが、照子には厳しすぎると感じられる時がある。照子は、もともと素直な性質であり、継母に反抗することはないものの、厳格さを恐れて、顔色をうかがい、嘘や隠し事をする様になる。

たとえば、友人の持つているおもちゃと同じものが欲しくても、欲しいというだけで、叱られる様に感じ、言い出せない。また、女中は慰めのつもりで、「本当の母親でない」と、どうしても情愛が薄いと照子に語る。これをきっかけに照子は継母は自分を憎んでいると思ひ込み、恐れる様になる。こうした心理的な葛藤を、佐藤は「僻み」と捉えている。

なお、照子の胸の「僻み」を解消したのは、継母の慈愛である。大方の家財を手放し、粗末な家に引越してから、継母は照子を養うために会社の書記として勤めるようになる。照子が、学校から帰り一人で留守番をしている時に、押し入れを開けてみると、そこには照子の蔵書が一冊も欠かさず並んでいた。そして、筆筒を空けると、継母の衣類はわずかだが、照子のもものはぎっしり入っていた。

この時、「本当のお母さんかも知れない」と感じ、「母の慈愛に涙を流してから照子の胸には全然僻みが消えてしまった」のであり、継母の愛情に感謝するようになる。

### 六、少年小説と少女小説の相違点

二つの小説は、同じ作家の作品だけに類似点が多い。まず、汚れない心の重要性を説いている点である。また、一時的に、「すさんだり」「僻み」が生じるが、年長者の助けにより健やかに回復し、ある種の成長を遂げるという点も共通している。

ただし、相違点もある。黙々先生の千三に対する最初の教えは、「其の心をも毎日毎日洗い浄めて新な気持にならなければならぬ」ということであった。つまり、「少年」の心は「浄め」ることが基本的にで

きるといふ位置付けとなっているのである。

一方、「少女」の場合は「少しでも汚ないものにふれると染まってしまう。染まった糸は元の通りに白くするにはよほど骨を折らねばならぬ<sup>(26)</sup>」とされている。つまり、汚れからの回復は相当に困難だとされているのである。なぜ「少年」と「少女」では、このような違いがあるのだろうか。

太平洋戦争敗戦以前の日本では、男性と女性とでは、期待される役割が(現代よりもはっきりとした形で)異なっていた。それゆえ、「少年」と「少女」に、期待されるジェンダー役割も(現代よりもはっきりとした形で)異なっていた。「少年」は将来、平時には労働し、戦時には兵士として従軍することが求められた。労働や戦闘を経験することで、その心が「すさんだ」としても、男性として生きる限りは避けがたい。したがって、打たれ強さや不屈の精神が男性にとって美質となる。また、苦難に遭っても「すさんだ」りせず、その心を浄めて新たな気持ちとなることが重要である。

一方、中産階級の女性は基本的には家庭にあって、子どもを産み育て、労働による夫の疲労を回復させる役割を果たすことが求められた。また、結婚後は妻として母として、家庭の中に居る―すなわち良妻賢母役割を果たす―ものとされた<sup>(27)</sup>。階級による差はあるものの、男性は公的、女性を私的とする性別役割分業が基本とされた。社会に出ることが望まれていないため、「少女」の理想的なあり方は、父母に守られ、無垢に汚れなく育つことだった<sup>(28)</sup>。

照子もまた、教育熱心な継母に守られ、厳格に育てられた。しかし、それでも心に「僻み」が生じることもある。こうした時に、主人公の心を正す導き手に、同性の大人が選ばれている。千三の苦しみを救うのは、男性の師匠と先輩である。照子を救うのは継母である。これらの年長者の助けを経て、困難を克服している。

さらにいえば、少女小説「夾竹桃の花咲けば」での格言の語り手は、継母ではない。また作中のどの登場人物でもない。「昔々、中国に偉い学者があった。その名は墨子である。墨子は或時白い絹糸を見て涙

を流した<sup>(29)</sup>」と、全知視点の語りにより記されており、作者から読者に対する教えとも読み取れる。対して、千三は、黙々先生に直接教えを受けている。「少年」には自らの力で自己を正すという、主体性を期待しているのである。

しかし、少女小説を非教訓的なメディアだと捉えるのは早計である。「少年」に求められる規範と「少女」に求められる規範は異なっているのである。「少女」に求められた規範的行為は、将来の良妻賢母役割へと連動し、自我を抑え、控えめであることが求められたのである。それゆえに、「少女」に対して、積極的に行動を促そうとするわけではなく、受動的であることさえも、「少女」らしいことだった。

## おわりに

ここまでの考察により、「少年」と「少女」に与えられる「格言」は、近代国家のジェンダー役割に沿った形で、それぞれ異なっていたことが明らかになった。昭和の初めから十年代に『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の読者であった人々は、戦後の日本社会を築き現代日本の礎をつくり上げてきた世代に当たる。それゆえに、この時期の少年少女小説を分析することは重要である。ただし、いくら絶大な人気のある作家であったとはいえ、佐藤紅緑のみでは昭和戦前のジェンダー規範の全容を示すことはできない。他作家との比較考察が、課題として残されている。

## (注)

(1) 佐藤紅緑に対する、同時代の読者の支持については、桑原三郎が指摘するように、彼の「ああ玉杯に花うけて」によって、『少年倶楽部』の部数が、三〇万部から四五万部に増えたことがよく示している(『少年倶楽部の頃―昭和前期の児童文学』慶應通信、一九八七年、一一―頁)。

(2) 日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇〇―二〇〇二年(丁

- (1) K公開 二〇〇七年)
- (3) 中村桃子『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』日本放送出版協会、二〇〇七年、三二頁。
- (4) 加藤謙一『少年倶楽部時代——編集長の回想』講談社、一九六八年、一一六頁。
- (5) 鈴木美穂『少女倶楽部』岩淵宏子他編『少女小説事典』東京堂書店、二〇一五年、三一八頁。なお、『少女倶楽部』の編集方針は、「おもしろくてためになる」であり、後述する兄弟雑誌『少年倶楽部』と骨子は重なっている(同前)。
- (6) 佐藤忠男『少年の理想主義』明治図書出版、一九六四年、一六〇頁。
- (7) 同前、一六一頁。
- (8) 加藤前掲書、一六頁。なお、昭和戦前の佐藤紅緑の少年小説を、「人格の向上」を目指す「修養」という観点から取り上げた先行研究として、笹生真奈美による「佐藤紅緑少年小説研究——あ、玉杯に花うけて」から「街の太陽・「満潮」へ」(『立正大学大学院日本語・日本文学研究』一四、二〇一四年二月)を挙げることもできる。
- (9) 加藤前掲書、一七頁。
- (10) 本稿を記すにあたって、『少年小説大系 一六 佐藤紅緑集』(三一書房、一九九二年)を参考している。「少年小説大系」は原則として初出の雑誌掲載のものに準拠している。
- (11) 佐藤紅緑「ああ玉杯に花うけて」『少年小説体系 一六 佐藤紅緑集』三一書房、一九九二年、二八頁。
- (12) 同前。
- (13) 同前、六九頁。
- (14) 同前。
- (15) 同前、七四頁。
- (16) 同前。
- (17) 同前、七五頁。
- (18) 同前、七六頁。
- (19) 同前、八一頁。
- (20) 同前、八四頁。
- (21) 佐藤紅緑「夾竹桃の花咲けば」『少年小説大系 第一六巻 佐藤紅緑集』三一書房、一九九二年、二〇九頁。
- (22) 同前。
- (23) 同前、二〇七頁。
- (24) 同前、二一八頁。
- (25) 佐藤前掲書(注11に同じ)、六九頁。
- (26) 佐藤前掲書(注21に同じ)、二〇九頁。
- (27) 近代日本の男女の性別役割の違いについては、研究が重ねられている。深谷昌志『良妻賢母主義の教育』(黎明書房、一九六六)一九九八年)、小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、一九九一年)、若桑みどり『皇后の肖像——昭憲皇太后の表象と女性の国民化』(筑摩書房、二〇〇一年)等がある。なお、平時には基本的には良妻賢母役割が求められるが、経済的な事情や戦時等に、女性も労働する場合があった。この点は、若桑みどり『戦争がつくる女性像——第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』(ちくま学芸文庫、一九九五)二〇〇〇年)に詳しい。「夾竹桃の花咲けば」でも、父がアメリカに渡航し不在となり、生活のために継母と娘は労働せざる得なくなる。この就労は積極的に行っているわけではなく、非常時に止むを得ず行っているものであり、特例という扱いである。
- (28) 「少女」期のジェンダー規範における「純潔」の持つ意味と機能については、拙著『少女』像の誕生——近代日本における「少女」規範の形成』(新泉社、二〇〇七年)で明らかにしている。
- (29) 佐藤紅緑前掲書(注21に同じ)、二〇九頁。

(受稿 二〇二一年九月三十日、受理 二〇二二年十一月十日)